

## 渡良瀬遊水地湿地保全・再生モニタリング委員会ニュースレター

### 第13回渡良瀬遊水地湿地保全・再生モニタリング委員会を開催しました

平成28年10月24日（月）13：00～16：00に、栃木県栃木市の藤岡遊水地会館において「第13回渡良瀬遊水地湿地・保全再生モニタリング委員会」を開催しました。

#### ◆モニタリング委員会の概要

今回は委員7名にご出席いただきました。

【委員参加者名簿】（五十音順・敬称略）

（学識者・NPOなど）（五十音順・敬称略）

青木 章彦	作新学院大学女子短期大学部 教授
大和田 真澄	栃木県植物研究会 会員
栗原 隆	栃木県立博物館 主任
佐藤 邦明	埼玉大学 名誉教授
清水 義彦	群馬大学大学院 教授
関口 明	渡良瀬遊水地野鳥観察会 副会長
高松 健比古	渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会 代表世話人

当日は、委員会の前に委員とともに、実験地の現状を視察しました。

委員会では、本年度のモニタリング結果（中間報告）および今後の検討方針について報告するとともに、今後の掘削候補地について説明しました。委員からは今後の掘削方法や植生の維持管理方法などについてご意見やご助言を頂きました。



## ○報告内容と主なご意見

### <モニタリング結果について>

実験地における植生や水位の調査結果を示すとともに、掘削手法へ反映する内容や今後の実験の進め方について報告しました。ポイントは以下の通りです。

- 人工の窪地では、セイタカアワダチソウやヤナギ類の侵入が少ない。また、浅い人工の窪地を創出すれば、カエル類にとって良好な繁殖環境となりうる。
- 掘削後にヨシの残存根系が残っていれば、場所によって回復の速さに差があるものの、ヨシ原が再生する。特に掘削深の浅い場所では、シードバンクから在来のスゲ類の発生も期待できる。

### ◎主なご意見

- 水質分析は採水のタイミングが重要であり、雨水が多く含む期間を避けて採取することが望ましい。
- 地下水の起源とした水質を調査しているのであれば、それに応じたデータの分析方法が必要になる。例えば、イオン類に着目した分析方法がある。
- 掘削予定箇所における昆虫調査については、貴重種が確認されているようであり、良いデータが取得できていると思われる。特に湿地を指標する昆虫に着目しながら、今後も同じ調査手法で、モニタリングを継続して欲しい。
- 水生生物の生息のためには、水が絶えず存在する小さな池が必要である。池の規模については、「良好な生息場所」や「生息しない場所」のデータを比較しながら導き出せるとよい。

### <今後の検討手法について>

多様な湿潤環境の再生方法、植生回復対策、ヨシ原の再生方法、外来植物対策、植物重要種の保全方法、人為攪乱の導入などについて委員会に提示しました。主な内容は以下の通りです。

- 湿地植生やカエル類を定着させるために、10 cm程度の湿地造成また乾燥しやすい肩部に人工窪地を設置する方法も試行する。
- 「裸地」や「浅い開放水面」を維持するためには、定期的な人為攪乱が必要であると考えられることから、人為攪乱型実験地の造成を検討する。
- ヨシズ作りに適したヨシ原がどのようなものであるか、本年度、文献調査や聞き取り調査、現地調査によって確認する。

### ◎主なご意見

- 人為攪乱型の掘削地の試みは画期的であり、興味深い結果が得られると思われる。
- 理想的な表土撒きだしの時期は冬季であり、今後表土撒きだしを行う場合は注意が必要である。
- 現況保全地区の見直しを行うのであれば、植物重要種の分布調査を完了させた上で評価を行うのが望ましい。また、現地で見直し箇所を確認した上で議論を行えるとよい。
- ヨシ焼きの実施時期を早めた方がよいと考える（2月下旬～3月初旬）。温暖化などに伴い、春季に雨が降り出すタイミングが早くなっている。また、ヨシの芽だし時期も例年より早い。